仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二ー22ー七三七一番
編集・発行人　首藤　正義

『教区大会』あと一年！

平賀　徹夫

「明日の教会をめざして ー 教会の未来は家庭にかかっている ー」をテーマとして開催される教区大会まであと丁度一年となった。大会は明年9月14～15日、仙台白百合学園を会場とする。企画委員会はこのほど最終的にプログラムを決定、実行委員会も組織されて開催準備にとりかかった。プログラムは下記のとおりであるが、それと平行して教区の歴史および各教会や修道会、施設等を紹介する展示会も行なう計画である。

「仙台」司教区となってから五十年になる今、我々の教会共同体は生きたものになっているといえるだろうか。「互いに愛し合いなさい。それによって人は皆、あなたたちがわたしの弟子であることを認めるであろう（ヨハネ13の35）」という主のお言葉は正しいということを現す、生きいきした教会だろうか。明日の教会を目ざして何が最重要だろうか。

教区大会のねらいは二つある。まず、信者のいる家庭の「あるべき姿」について話し合う動きが各教会の活動として起こること。これは家庭こそ生きた教会共同体の基盤であり、信仰に根ざした生きいきした家庭なしには生きた教会共同体もあり得ないという理解に基づく。　大会でのパネルディスカッションは「家庭の現状とそのあるべき姿」という主旨で行なわれ、講演は教育関係の大家G・フォス師と高名な聖書学者で小教区も司牧されるA・コレン師の講演であるから、各教会での話し合いが深まっていればいるほど興味深く参加できよう。その二は、仙台司教区の我々が一つであることを体験すること。教会のいわば細胞である小教区の枠を越え、青森県から福島県までの信者が主の食卓を囲んで一つに結ばれること。参加旅費を等しく負担し合うプール制はこの具体的一助にと企画され、各教会の〝企業努力〟による旅費切りつめも同じ考えから呼びかけられるものである。

生きた明日の教会を目ざし、一年後に迫った大会に向かう体勢を、皆で着々整えたい。

教区大会プログラム

9月14日（日）
13時　開会（挨拶・みことばの祭儀）
13時30分　講演（一）G・フォス師
14時30分　質疑応答　14時50分　休憩
15時20分　パネル・ディスカッション
18時　自由参加の祝賀・懇親会

9月15日（敬老の日）　9時　集合
9時10分　講演（二）A・コレン師
10時10分　質疑応答　10時30分　休憩
10時45分　ミサ聖祭および閉会式
12時　終了

司教様の日程

（8月25日現在）

9月20日　スペルマン病院理事会
22日　一本杉教会堅信
23日　司牧評議会（仙台）
24日　人権福祉委員会（東京）
25～27日　広報担当者会議（松島）、老人福祉・保育施設協議会東北ブロック合同研修会（仙台）
29日　青森県信徒大会

10月5～6日　志家教会堅信
7～8日　ベトレヘム会月例会（盛岡）
9日　常任司教委員会・財務委員会（東京）
10日　オタワ愛徳修道会来日25周年記念（仙台）
12日　宮城宗連法編集会議（仙台）
13日　北仙台教会堅信
14日　教区司祭団役員会
15～16日　カテキスタ会役員会（仙台）
2017日　カリタス・ジャパン四ツ家教会堅信

三教区合同 司祭研修会

今年は、隔年開催されている三教区（新潟・浦和・仙台）合同の司祭研修会の年にあたっている。今回の担当は浦和教区。具体的な案内や参加申し込書等、近日中に送られてくる見通しである。

今回の研修会の要項は次のとおり。

日　時　10月29日(火)～31日(木)
場　所　栃木県、那須のホテル・サンバレー
テーマ　信徒の養成（信徒神学）
参加費　二万円

研修は、四つのサブテーマ（日曜日の集会、祈りとその養成、信徒の霊性、勉強と体験）に分かれて話し合う分科会形式で行われる。

＜若者の声＞

J・O・C体験学習……フィリピンの労働者と出会って……

弾圧にもめげずストライキを続ける労働者とマニラで会いました。スモーキーマンテンと呼ばれるゴミの山で人間以下の生活を強いられ、そこからも追い出されようとしている人々の現状を見ました。今まで私は新聞記事の一つとしてそれらを読み流していました。しかし反政府デモに参加する彼らは私達と同じように職場の問題に悩み、ディスコが好きという青年達でした。単なるワールドニュースの登場人物ではなかったのです。

彼らは今、先進諸国の援助、多国籍企業の進出に苦しめられています。電車という援助のため住居、職を奪われ、銃という援助のため束縛されています。失業者があふれ、一人の求人に対し百人もの人々が職を求めて詰めかけます。マリベレスの輸出加工地区で会った18歳の女子は低賃金のため残業を余儀なくされ、24時間働くこともあるという。会社に抗議すると、「職がほしいのか退めたいのか」という答え。憲法は政府の都合の良いように変えられています。ぎりぎりのところまで追いつめられながらも強く明るく生きている人達。生きるために毎日を生きているのです。援助とは、工業化を進め、自然を破壊し、彼らの生活を脅かす事なのでしょうか。後進国は先進国に操作されている。それで良いのでしょうか。

東南アジアの正確な情報は伝わりにくく誤解される事柄が多い。それ以上に、隣人の苦しみを知らずにいることは、それ自体、私たちの悪です。

国は、それぞれ違った歴史を持ち、歴史を担います。私達青年がこのゆがみを直す努力をしなければなりません。

まず、身近な職場から、家庭からとなり人のことを自分の問題として受けとめていこう、と思っています。

（佐藤　則子）

【おしらせ】

聖書深読会

日　時　10月26日(土)19時～21時
　　27日(日)9時～17時
会　場　聖ドミニコ学院高校
　　仙台市角五郎2－2－14 tel 22－6337
指　導　奥村一郎師（カルメル会）
会　費　二千五百円（宿泊四千円）
　　（27日昼食代を含む）
持参品　聖書・筆記用具
申込方法　tel 25－一〇五五聖ドミニコ修道院へまたはハガキにて。
（参加者名、所属教会または修道院、宿泊の有無、聖書深読の経験の有無を明確にお知らせ下さい。）申込締切10月20日(日)
責任者　聖ドミニコ修道院シスター大沼

講演会

演　題：統一教会はキリスト教か？
講　師：浅見定雄先生（東北学院大助教授）
日　時：10月26日(土)　夜7時～9時
会　場：元寺小路教会・信徒館
会　費：無料
主　催：元寺小路教会

仙台・教会学校リーダー研修会

テーマ（自分の信仰を子供達にどう伝えるか）
講　師　岩橋淳一師（東京教区教会学校部長）
日　時　11月2日(土)18～21時（日帰りも可）
　　11月3日(日)9時～16時
会　費　仙塩地区以外の方三千円（宿泊含む）
場　所　光ケ丘研修所（東仙台）
申込先　983仙台市東仙台6－8－25
　　オタワ愛徳修道会
　　シスター青郷 tel (56)五二七九

仙台教区内で初めて
二人のスカウトがキリスト教章受章

去る8月2日から6日まで、長野県の佐久高原で、第五回全国カトリック・スカウト合同野営大会が開かれた。「キリストと共に」をテーマに全国から千五百人程のスカウトたちが集まった。大会3日目のミサの中で宗教章授与式があり、宮城37団（東仙台教会）の山口直人君（高2）と大石晃久君（中3）の二人がキリスト教章を授与された。同章の受章は東仙台教会にスカウト活動が発足して15年になるが初めてのことである。現在、東仙台教会にはBSGSのスカウト、リーダー、団員あわせて257人が活動している。

宗教章は、スカウトが明確な信仰をもつことを奨励するために制定されたものである。信仰は、単なる知識ではなく各人の全生活、全行動を貫いて示されるべきものであるから、宗教章は明確な信仰を持とうとする努力が、その生活・行動の中にはっきりと認められる人に対して与えられるものである。現在、日本での宗教章はキリスト教章、仏教章、および神道章の三種がある。

花巻での家庭訪問宣教
―聖パウロ女子修道会―

花巻教会のゲーヴィレル神父様のお招きにより、20数年ぶりに花巻市内の家庭宣教をおこなった。仙台・東京・名古屋・大阪から集まった7人の姉妹による五週間という限られた日数での宣教だったが、中心部をはじめとする市内の主な地域にある家庭・職場を一軒一軒訪問できた。約八千軒の人々に、み言葉の種まきをしたことになる。

み言葉や教会の地図・住所・ミサの時間などの掲載されたパンフレットを出会うすべての人に渡し、教会を紹介しながら良書（福音）の普及に明け暮れる毎日だった。門前払いをされることもあったが、この方のためだけにでも花巻に来てよかったと思える出会いもあった。

また、「ものみの塔」の活動は活発で、周期的に家庭を回っており、輸血拒否事件に対する非難の声が各所で聞かれた。この問題に関するカトリック新聞の記事のコピーを神父様が用意して下さったので、関心のある方々に差し上げた。それは、カトリック教会の立場を理解していただくのに役立った。

以前教会と何らかの関わりのあった方々の多くが、30年間当教会で司牧・宣教に携わってこられたゲーヴィレル神父様やカテキスタの加美山先生のお名前を覚えておられる。これは、お二人のお人柄によるところもさることながら、そのときの関わりの深かったことにも大きな理由があると思われる。

花巻教会の皆様と心をあわせて、まかれたみ言葉の種を成長させて下さる神様に祈り続けたいと思う。

＊神学院報告(4)

「目下修業中」

洗礼者ヨハネ氏家 和仁
（元寺小路出身）

神学生となり、初めての夏休みを教区で過ごしております。

夏期学校、高校生練成会、合宿などに参加させていただき、子供達と出会い、色々な体験をすることができました。

夏期合宿後、ある小教区のお手伝いをしております。

「神学生さん、今日の朗読をお願いします」「この荷物をあそこまで運んで下さいませんか」「何か、お話ししていただけませんか」と、信者さんからの求めにどぎまぎしている次第です。

「神は、出来事、人々を通して絶えず語りかけておられる：」とのある日の講義を思い出しました。

神からの呼びかけをいかにつかみ、いかに応えていくかを体験を通して実感しております。

教区にいる時でも、神学校にいる時でも皆の暖かい祈りに支えられて、神の呼びかけに応えていける姿勢を育て、磨いていきたいものです。

長い道のり、どうかお守り下さい。

小林有方司教 金祝ミサ説教 (3)

五十年を振り返って

教会ー救いのみ業の継承

それではいけないのだ、なんとか何かがなされなければならない。イエズス様は、「わたしの仕事は終った」とおっしゃって息をひきとられましたけれども、しかし今見る通り、イエズス・キリストの救いのみ業は決して終っていないのです。それを終らせるのは、イエズス・キリストご自身ではありませんでした。イエズス・キリストは、「わたしは天に去って行く」とおっしゃって、目に見える姿を私達の目からお消しになったのです。

イエズス様は病人があれば、どこまでも行って病気をお治しになりたい、心病む者がいればしっかりと胸に抱いて、その胸の傷をいやしてやりたいと今でも思っていらっしゃるに違いないのです。

しかし、イエズス様が体をもってこの世に存在しておられないとすれば、いったい誰がそのイエズス様の救いのみ業を果たすのですか。それこそイエズス様の体である教会以外にはないのです。聖パウロは、「教会はキリストの体である」と言明しました。

イエズス様ご自身、「あなたがたが、わたしの名において、わたしの愛のうちに、二、三人集まる所、そこにわたしはいる」とおっしゃいました。本当にキリストを信じ、キリストに出会って信仰の決断をもって、キリストの弟子になろうとする者の集う所、相寄る所、そこに教会がある。その教会こそ目に見えるキリストの体なのであるとすれば、その教会が、キリストの救いのみ業を世の終りに至るまで続けないなら、世界は滅んでしまうことは、目に見えています。

今、皆さんも毎日、新聞をご覧になって、余りにも愚かな人間の所業、永遠の滅びに足早く、あえて落ち込んで行こうとする人々の姿をみられるでしょう。これを救うのは教会しかございません。そうして、今こそ教会が本当にキリストの生ける体にならなければならないのです。

このことが公会議でしきりに叫ばれたのでした。それは長い二千年の歴史をもった教会ではなく、現在の人々に呼びかける教会、現代の人々と共に歩む教会、人々の悲しみを自分の悲しみとし、人々の喜びを喜びとする教会、そういう教会にならなければならない。

ヨハネ二十三世の「アジョルナメント」これはキリストの教会の現代化ということでした。今生きている教会、キリストが今ここに生きている教会にならなければならないというのが、ヨハネ二十三世の思想でしたし、後を継いだパウロ六世の思想でもありました。こうして、第二バチカン公会議は教会の刷新を叫び、その刷新の糸口を切り開きました。教会の扉を大きく開き、現代の病める人々、悩める人々に、教会の歩むべき方向を決定したのです。

四年間続けて公会議にあずかった私は、使命の重大さを身をもって体験して参りました。

教区長を引退

そこで、こういう私が何かをしようと思っても、この愚かな小さな欠点だらけの学問も何もない私には、それは出来ないのだと思った時、私は出来るだけ早く有能な司教に私の司教の座を譲り渡したいと思いました。

第二バチカン公会議で、司教は75歳になったならば出来るだけ引退するようにという勧告が出されたのでしたが、私は75歳まではとても待てない、そう考えて、第二バチカン公会議が終って間もなく、私はローマに、司教の座を譲りたいという願いを出しました。

すぐには聞き入れてもらえませんでしたが、何年か執ようにその願いを繰り返すうちに、ローマもようやく私の真意をくみとってくださり、「ではおまえの思うようにするがよい」といって教区長職を解いてくださいました。早速私は、本当に有能なすばらしい後継者を見つけ、そのことをローマ教皇庁に報告し、

（次ページ下段へつづく）

ブラジルを訪ねて（最終回）

東仙台　長井和子

「この国の一人でも仕事がなく、パンにありつけず、住む家もなく、文盲の人がいるとしたら、そのすべての富はいつわりである」

（ヨハネ・パウロ二世）

一九八五年夏、仙台の街角に立っていると、人々のカラフルな美しい装いが、貧しい重ね着の服装を見なれた私の目にはまぶしかった。レジャーに出かける人々でごったがえしの駅や空港、あふれる商品の数々、子供たちは自由に小遣いを使い買物に走る。なぜ地球の裏と表ではこんなにも相違があるのだろうか。私たちが平安な生活が出来ることそれは良いことである。唯、自分たちだけの自己本位に終るとしたら神の国は遠い。現在地球の3分の2が飢えている。ブラジルでも一億二千万人のうち八千六百万人が飢えている。0歳児の年間死亡率は30万人にも上る。物価の上昇率は驚く程で、貧しい人の栄養源であった豆も500％の加昇で「フェジョアダ」昔主人の捨てた豚の耳やシッポを奴隷が豆と一緒に煮て食べた物も今は金持に取られた。一人の母親は新聞紙を集め煮て塩味をつけ子供に食べさせた。乳房にすがりついている子供の口は母親の血で染まった。しかし彼らは不正義・抑圧から起るさまざまな悪からの解放の為、連帯して生き初めた。彼らは実際にパンをさく兄弟愛を実践しながら、パンをふやし分かち合うことを学んだ。又、不正義を克服するために金曜日を祈りと断食の日とし霊的エネルギーを蓄えている。

「力ある方がわたしに大きな事をして下さった。そのあわれみは代々限りなく、主をかしこみ恐れる者に及びます。主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引きあげ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」私たちは毎日マグニフィカトを歌う。聖母賛歌を神の光に照らして歌う時、神は人間の協力によってこれらのものを実現されることを深く悟らせる。現在の日本の平和と豊かさは日本人の努力のたまものではあるが多くの国の人々の援け、特に第三世界の人々の犠牲から成り立っていることも見直そう。特にマスコミにも取り上げられない人々の苦しみ、うめきに耳をかたむけたい。地味な仕事を続ける宣教師の為に祈ろう。私たちも何らかの痛みを感じながら捧げよう。共に祈り働く兄弟達の輪を広げて。4年前の旅の出会いは互いの交わりのなかで一層深められた。日本での私たちの小さな仕事を神は大きくお使い下さるさまを見せられた。文化社会に住む者の持たないもう一つの愛を教えられた。ブラジルの旅でいっぱいに受けた愛がエネルギーとなって燃えている。そして私は又次の旅へと歩きつづける。感謝にみちて。

信徒大会の折、教会学校の皆様方から多くの献金をいただき心から感謝申し上げます。マルゴット神父様に送金いたしました。紙上をおかりしてお礼申し上げます。

（前ページよりつづく）

そうして私の後継者になっていただいたのが佐藤千敬司教様です。

こうして仙台教区は、新しい司教様によって力強く導かれることになりましたので、私は喜んで身を引くことができました。それから早くも10年の年月が流れました。

私は、司祭叙階50年というその歳月が、様様な出来事によって次から次へと破乱を巻き起し、う余曲折をもって過ぎ去った50年だと思うとき、それが本当に早く短く去って行ったのは、もちろんのことだったのだと思いますし、よく理解出来るのです。

今、こうして50年の歳月を思いながら、そして心からこの50年を祝って下さろうという皆様とともに、ここにこうして忌たんなく話し合える時間が、お話を申し上げる時が来たことを心の底からうれしいと思います。

（次号につづく）

【編集室から】……

「教区報、東京の知人に送っています」「未信者の友人に差し上げています」「『ブラジルを訪ねて』興味深く読ませて頂いています」そんな言葉を耳にするとうれしくなる。

今月号で「ブラジルを訪ねて」は終ります。長井さん、本当にありがとうございました。ご苦労様でした。

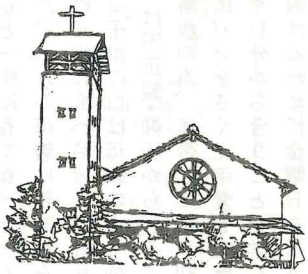
来月号から、来日30年になろうとしている村首ステファノ神父様による連載が始まります。1メートル90数センチの高い視点から見た日本、そして日本の教会等についての連載が楽しみです。

（首）

おらが教会

(55)

岩手・一関教会



岩手県の南玄関口、一関がキリストの光に浴したのは明治20年で、最初の受洗者が出ております。当時は盛岡の巡回教会で、信者宅を借りて宣教をしておったようです。明治35年、デフレン神父のとき現在地の近くに三百坪の土地を8円で購入、ここに民家をうつし聖堂に改装、教会堂をもった宣教活動が始まりました。

昭和3年土井神父のとき、小さいながら洋風ゴシック式教会堂が建設され、これが昭和23年まで続きます。この間水害あり、また第二次大戦で外人司祭の不遇、司祭の不足等あり一時停滞しました。昭和20年の終戦後は貧困、不景気、混乱の社会不安の中にあってキリストは希望の光となり、教会を訪れる者が続出し、多数の受洗者も出ました。教会が最も発展、繁栄した時期です。教会が手狭になったので、当時の司祭ヴェイエット神父は昭和23年、半円形のかまぼこ型聖堂を建てました。次の昭和24年、岩手県の宣教はスイスのベトレヘム会に委ねられ、ガルトマン神父が着任しました。27年、スイスからの浄財により現在見る、岩手県で最も大きい聖堂が建てられ、我々信者に大きな喜びを与えてくれました。翌28年、かまぼこ型旧聖堂を利用して愛心幼稚園が開園、初代園長にエグロフ神父がなりました。この年スイスの信者からの贈物アンゼラスの鐘がとりつけられ、朝夕、愛と平和の鐘の音が市民につたえられています。

愛心幼稚園は開園以来大変評判がよく、申込多数で狭くなったので、昭和34年改築されました。当時としては他に類をみない充実した園舎でした。それから20余年、定員増などで増築をかさねながら、市内第一の好評の中で発展して来ました。しかし年とともに段々と時代おくれ、欠陥が目立って来ました。

このことが小野忠亮神父のときから問題としてとりあげられ、遂に昭和57年佐藤守也神父のとき、鉄筋コンクリートの最新の近代的施設をもつ園舎に改築されました。旧園舎は聖堂の西側に移され信徒館になっています。

さて教会の活動状況にうつりましょう。信者は名簿上280名ですが、主日には約70名の方が見えられます。教会の維持、典礼、諸行事、予算等のすべては司祭を中心とした運営委員会で審議され実行にうつされています。

今年の総会で長年の懸案であった信徒会則が決定され、新しい発展段階に入っています。

教会の色々の行事で大活躍しているのは婦人会で、教会の発展は婦人会をおいては語ることが出来ません。クリスマス、復活祭等の諸行事、献堂式、幼稚園の開園式、開園時の園児服の縫製等々、常に陰の主役、縁の下の力持ち的役割を果してきました。復活祭には婦人会の手づくり料理、余興をしながら復活を祝います。クリスマスには婦人の手によるおでん、豚汁等を販売し、飲物コーナー等も設け、舞台の催物を楽しみながら、夜の一とき一般市民をまじえて祝っております。外に婦人会は敬老の行事、病人訪問、土曜の定例の聖堂掃除等にも及んでいます。他の会は一時活発だったときもありましたが、ここ数年は沈滞しております。3年前主任司祭となられた鷹觜神父は、教会の振興に熱意をもっておられその主唱により、去る6月壮年会を開きました。久しぶりの会合で時間のたつのも忘れる夜の一ときでした。青年姉妹会も近く開かれることになっております。今後これを踏台にし、信者一同一丸となって活力ある教会に復活すべく頑張りたいと思います。

子供達の宗教教育は日曜ミサ後、シスターによって行われております。また一般小学生を含めた土曜学校では、約10分の宗教教育を加味して、書道と英語の教育を行っております。

これら生徒の夏の楽しみは海浜学校で、例年宮古教会で二泊三日の合宿を伝道士阿部輝雄先生の指導により行っています。尚、最後に一関教会から高橋昌神父をはじめ8人のシスターを送り出していることは当教会にとっての大きな誇りでありますが、尚多くの聖職者が出ることを信者一同いつも祈っております。

（斎藤　健治）